

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア通信 ⑩

＊いにしえのギリシアを想う～リアーチェのブロンズ像～＊

深草 真由子

紀元前五世紀というと、あまりに遠い昔のような気がして、その時代の人々の育んだ文化の蓄積の上に今があるという実感は、ヨーロッパにいてもなかなかもてないものだ。その頃、それぞれがライバル同士のいくつもの都市国家からなるギリシアは、現在の南イタリアやフランス、スペインの地中海沿岸にも勢力を伸ばし、世界でもっとも進んだ文明を誇る地域のひとつであった。そのギリシアに、黒海からインダス川まで広大な領土を抱えるアジアの強国ペルシアが侵攻してくる。東洋と西洋の異なる二つの文明の対決ともいえるこの戦争に勝利し、ギリシアは世紀の半ばに文化的な最盛期を迎えた。アテナイ(アテネ)ではアクロポリスが再建され、パルテノン神殿が完成し、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスらの悲劇が上演され、ソクラテスが対話による探求を行って「無知の知」を問うた。そして戦争で活躍した無産市民の民会への参加が実現し、民主制政治が確立された。ヨーロッパの文化的基盤をローマ・ラテンに求めるなら、そのローマが負うところのきわめて多いのが、この時代のギリシアだった。

そんな古代ギリシアから時空を超え、現代のわたしたちの目の前に突然現れた「リアーチェのブロンズ像」。イオニア海の底に沈んでいるのが発見されてから四十年以上が経過し、ようやく本拠のレッジョ・カラブリア国立考古学博物館に戻ってきたのが昨年末のことである。ひきしまった四肢、雄々しい立ち姿、力強い眼差し。優れた芸術作品に、月並みな言葉をいろいろ並び立てたとこ

ろで何の意味もなかり。その完璧な裸体、存在感…。見る者の心を一瞬にして奪う、そんな圧倒的な美しさがこのブロンズの戦士たちにはある。驚かされるのは、髪の毛やあごひげの造りの緻密なこと、そして腕や脚に浮かんで見える血管までがリアルに表現されていることである。素人目には分からないが、Uomo maturo の脚の筋肉のつき方は乗馬に慣れている男のそれであって、Giovane の方は、こちらもよく鍛えられていることは確かだが、馬乗りの脚ではないのだとか。こうした肉体の細部へのこだわりは当時の医学・解剖学の水準の高さを思わせるものだ。

前三世紀にマグナ・グラエキア(イタリア半島南部とシチリア島のギリシア植民都市)が、前二世紀にギリシア、マケドニアがローマの属州になるが、軍事力でギリシアを征服したローマ人は、文化面においては逆にギリシアの虜になった。彼らはギリシアの学問をすすんで学び、優れた彫刻や絵画作品を所望してローマへ持ち運んでコピーを作った。「リアーチェのブロンズ像」もおそらく、ローマ皇帝か裕福な貴族のコレクションの一部になるべく、もともとの台座から引き離され、ギリシアのどこかの港で船に載せられたのだろう。旅の途中、嵐に襲われて海底に沈み、二千年近くそこで静かに眠っていたというわけだ。

Giovane と Uomo maturo、この二人はいったい誰なのか？いつ、誰が、どこで彼らを作ったのか？発見からこれまで、古代美術や考古学の専門家らが「リアーチェのブロンズ像」をめぐるこれ

らの問題に取り組んできた。作品の様式分析、他のギリシア彫刻作品との比較、関連する文献の解説といった人文科学的なアプローチから、エックス線、内視鏡など医療機器を利用した調査まで、さまざまな方法が試みられている。真相に迫るにはまだまだ謎が多すぎるが、それでも有力な仮説も何種類か提出されていて、研究の進み具合や成果を追っていくのは面白い。

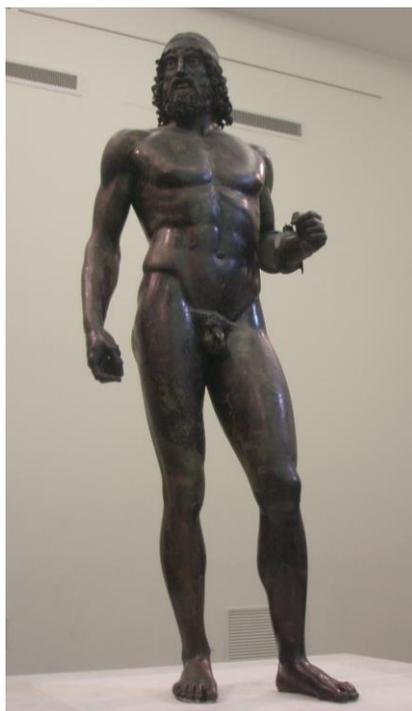
まずはブロンズ像の内部に残された粘土の分析から、Giovane がアルゴス周辺で、そしてその三十年ののちに Uomo maturo がアテナイ周辺で制作されたことが推定できるようだ。二体の像をよく見比べてみると、勇ましい Giovane の身体は少し硬くこわばった印象がある一方で、Uomo maturo の方はより自然体で、リラックスしているように見えないだろうか。この点に、粘土の化学的分析から判明した三十年という時間の差が、造形スタイルの違いとして表れているようだ。Giovane は、アルカイック・スマイルと呼ばれる穏やかな微笑みの特徴の、直立不動の人物像が作られたアルカイック期が終わり、より自然で躍動感のある人体表現が志向されていた頃に制作された作品、一方 Uomo maturo の方は、そうした新しいスタイルが確立した時代、前450年以降のギリシア芸術の絶頂期(クラシック期)の作品なのである。



【Giovane の上部部】



【Uomo maturo】



【Giovane】

古代ギリシアの彫刻では、神話の神あるいは戦争の英雄、オリュンピア祭典競技の覇者などが表現されるのが常である。だから「リアーチェのブロンズ像」もおそらくはポリスの市民らが称えるべき特定の人物なのだが、はたしてそれは誰なの

であろうか。これにも諸説あるが、テーバイ攻めの七将のうち二人、テューデウスとアムピラーオスであるとする説がどうやら有力だと考えられている。テーバイ攻めというのは、オイディプスの息子たちの王位争いに端を発するもので、アルゴス王の指揮のもと七人の武将が選ばれ、テーバイを攻略するために企てられた。Uomo maturo の表す勇将アムピラーオスは予知能力をもっていて、この戦で王をのぞく全員が死ぬ運命にあることを知っていたため、もともと遠征に反対していた男である。Giovane の表すテューデウスは闘いの際に致命傷を受けるが、女神アテネによって不死の身が与えられようとしていた。だがそのとき、出陣反対の意見が無視されたことを恨みに思っていたアムピラーオスは、死んだ敵将の首を切ってテューデウスに投げ与えた。瀕死のテューデウスがその頭を割って脳に食らいつくと、そのおぞましい光景を見て動転したアテネは、テューデウスを救いたいという気持ちをなくし、彼を死にゆくにまかせた。アムピラーオスもまた、最高神ゼウスが稲妻によって裂いた大地の深みに戦車もろとも呑み込まれて死ぬ。こうしてアルゴス七将のテーバイ攻めは失敗に終わってしまうのだ。「リアーチェのブロンズ像」がテューデウスとアムピラーオスだとすると、Giovane の唇の奥に不気味に光る歯も、Uomo maturo のどこかもの思いにふけた憂鬱な表情も、その理由を説明できるような気がする。この説を後押しする文献としては、パウサニ阿斯による世界最古の旅行ガイド『ギリシア案内記』(二世紀)がある。それによると、アルゴスの市民たちはテーバイ攻めの七将と、その子どもで十年後にテーバイ陥落に成功するエピゴノイらを称え、聖地デルポイの宝庫やアルゴスの広場に、これら十四人の英雄の像を一堂に配したモニュメントを建造したらしい。しかし、パウサニ阿斯が見たというこれらの像と「リアーチェのブロンズ像」を結びつける根拠はどこにもない。

古代に作られたブロンズ像のほとんどは、ロー

マ帝国が崩壊したあと中世の時代に再鑄造され、実用品に形を変えた。「リアーチェのブロンズ像」も、もし無事に旅の目的地に到着していたら、貨幣か武器か、もしくは農機具にでもなって、土の中に埋もれたまま忘れ去られているかもしれない。それを思うと、今こうしてわたしたちの目の前にほぼ完全な姿で残っていること自体、ありがたい歴史のいたずらのような気がしてならない。現在、レツジョ・カラブリア国立考古学博物館では「リアーチェのブロンズ像」を含むわずかな数の作品のみが公開されている。博物館のメインテーマ、マグナ・グラエキアの繁栄を伝えるコレクションを見学するには、建物の改修工事が終了する日を待たねばならない。



【地図 (地名は記事の中で言及されているものに統一)】

[参考文献]

Alberto Angela, I Bronzi di Riace. L'avventura di due eroi restituiti dal mare, Rizzoli, Milano 2014.

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743.212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

ローマと美術②

『ローマの小さな画廊』

浅田 朋子

私の夫はローマでコンテンポラリーアート作品を扱う画廊を経営している。店はカンポ・ディ・フィオーリ広場からサンタンジェロ城へ向かう古い通り沿いにある。観光地から少し離れているので落ち着いた雰囲気があり、地元の人たちも多く通る。小さな画廊なので夫ひとりが画廊にいるだけ。私は展覧会の準備・展示・ホームページの運営・展覧会のカタログ制作等手伝っており、用事がない限り、画廊には行かない。



【ギャラリーファーベル】

画廊で扱うアーティスト・作品は夫が選び、定期的に企画展を開いている。展覧会初日の夜は、私もホステス役で手伝いに行く。結婚当初はこの展覧会初日が嫌でたまらなかった。ホステス役が嫌なわけではない。当時の私のイタリア語は仕事

上のお客様と美術関係の話を流暢にできるレベルではなかったの、上手くお客様をもてなすことができなかったからだ。美術系分野で生きてきた私は、日本だとこのような場で緊張することもなければ会話に困ることもない。その歯痒さから、さらにイライラは増し、お客様に振る舞わなければいけないワインを陰でカブ飲みしたものだ。そして毎回展覧会が終わるたびに夫に愚痴った。「愚痴を聞いてもらいたい」という非常にネガティブな理由で、私のイタリア語はこのときから少しずつ上達していった。

外国語での会話は場数をこなして慣れるしかない。最初は緊張感で言葉がでない。でも慣れてくると、会話の中で正しい言葉・文法を落ち着いて選べるようになり自信が持てるようになる。頭の中で文章を組み立てる速度があがって会話もスムーズになり、自分の言いたいことを適切に相手に伝えることができるようになる。この段階になると、会話相手は「正しい単語・文法を使ってるか」ということでその人の教養をみる。ここで、いままでコツコツ勉強してきたことがものすごく役立つのだ。よく「間違ってもいいからとにかく話せ！」という人がいるが、そんなのはほんの初歩の段階でしか通用しない。私の経験上、間違った文法で会話する癖を後に修正する方がよっぽどややこしい。最初そうは思えないときもあるが、地道に勉強して覚えて会話で正しく使っていくことが遠回りに見えて一番近道なのだ。

さて、私たちの画廊は数人のイタリア人若手アーティストと、ココシンスキーとサングイーニという古手アーティストの作品をメインに扱っている。

この若手の中で夫が一番期待している画家がバレリオだ。自分の絵画スタイルを現在も模索中、人生も模索中の繊細な37歳である。自分探しの旅にでるのは仕事に疲れたアラフォー女性だけではないのだ。

今年もすでに3回も旅に出た。一度目はヨーロッパ美術の旅。これはいい、制作に大いに役立つ。次は瞑想の旅。インドでも行くのかと思ったら、お金がないのでイタリア国内ですましていたところが、何とも中途半端。三度目はギリシャへ。恋人とあまりにも親密になりすぎたので距離を置くためである。恋人同士が親密になって何が悪いの

か私にはさっぱりわからないが「いい距離を保つことがいい関係の秘訣」らしい。でもその恋人は「この前までスペイン旅行で楽しんで私にべったりだったのに、急に態度がよそよそしくなって一人でギリシャに行ってしまった。わけがわからない。彼が別れたいなら私は別れてもいい」と怒っていたそうだ。ぜんぜんいい関係になってないが、まあ、関わるとややこしいので、そっとしておくことにした。

さらに、いま彼は絵画制作に行き詰まっている。幸せだと絵がかけないタイプなのか？ そうでもない。前の恋人ともめてパスタも喉を通らなかったときも描けてなかったし。ややこしいタイプなのだ。しかし根がものすごく努力家でまじめなので、展覧会前にはきちっと作品を納めてくる。自分探しの旅に出る前も突然ふらりと姿を消したりしない。ちゃんと画廊まで夫に報告にくるところがなんとも可愛い。携帯もきっちり通じる。夫もバレリオの性格をよくわかっているので「まあ、好きにしたらいいさ」とは言うものの、自分の感情や直感が優先のバレリオの行動は彼には理解しがたいだろう、イライラした様子が伝わってくる。



【バレリオ・ジャコーネの作品】

ある日、ミラノに住む社長夫人が展覧会に来て、バレリオの絵を非常に気に入り買っていただいた。夫人にバレリオを紹介したところ、彼のナイーブな甘いマスク、柔らかい物腰とおとなしい性格は、彼の絵と同じくらい彼女の好みにあったようだった。なかなかの美男子である彼は、モテる男であ

る。

夫人は自分の家のサロン用に絵を描いてほしいという。できるならサロンの雰囲気を見てもらいたいのでミラノの自宅に来てほしいとのこと。こういう発注は結構ある。偶然にも数日後バレリオはミラノに行く予定をしていたので、すぐに話は進み、発注をお受けすることにした。購入していただいた絵もついでにバレリオが持っていくことになった。

夫人宅へ行く約束の日の夜、夫が気になりバレリオに電話してみると、暗い声でローマについてから報告すると言う。翌日、画廊にバレリオが来た。聞くと、家に行き購入した絵を掛けたまでにはいいが、サロンの絵について話しはじめたくらいからなんだか怪しい雰囲気になり、夫人がせまってきたというのだ。好きになった、愛人にならないか、というのである。なかなか魅力的な夫人だが、と一瞬迷ったらしいが仕事で来ているのでそういう訳にはいかないと思いとどまった。うまくまとめてさらりとかわす、というモテる男ならではの芸当ができないところが、なんとも残念である。結局サロンの絵の話はうやむやになり、おいしい仕事は流れてしまった。「すごく才能があるわ、素敵なお絵だね」と絶賛していた夫人の言葉、心から言ってくれていたと思いたいのだが…。

イタリアでは自宅用に絵画を購入する頻度が高い。それもサロンにどんと象徴的に絵を飾っているというより、家中に自分のお気に入りの絵を飾っている。ちゃんとした作品だけでなく、自分の気に入った絵を雑誌から切り取って額に入れて飾ったりもする。日本だと美術品を購入する際、誰の作品か、いくらしたか、評価はいいか、ということに重点が置かれる場合も多いのではないかと思う。

こちらでは他人の意見や価値観は関係なく「自分の気に入った物が最高の物」になる。だから無名の画家の作品も「この絵にこの値段は妥当」と自分が納得したら高くても購入する。

反対にある程度気に入ったくらいではどんなに安くても買わない。アーティストの友人が展覧会にきて、せっかくだし何か作品を買おうかな、という雰囲気を察知したときは、1万円くらいの手頃な作品、版画や素描なんかをそれとなしにすすめる

のだが、全てにおいて納得しないと義理でも絶対買わない。友達だったら、1万円くらい買おうよ、と私は思ってしまうのだが・・。

自分たちに本当に必要なものだけを購入し、ポロポロになったお気に入りには意地でも捨てない。お金があるとかないとか関係ない。自分たちの価値観にあった物かどうか、そこが一番重要な判断基準なのだ。

画廊にはいろいろな年齢のお客さんが来るが、若くても皆しっかりこの価値観のものさしを持っている。

若い20代のカップルが店にきて、造形作家マンディッチの、細い鉄の破片を溶接して人に見立てた立体作品を彼女が気に入った。マンディッチの作品は廃材、主に鉄を使ってつくられていて、一見するとそう見えないのだが、割と値は高い。青年はどうやら彼女が気に入った作品をプレゼントするつもりでいるようだ。しかし青年よ、この作品は安く見えるが、高いぞ・・。はやく気づいてくれ、と心で叫びながら、青年と夫とのやり取りを後ろで聞いていた。値段を夫が言ったとたん、二人の顔色が変わった。ほらね・・。さっきまでの幸せなプレゼント選びの空気から一転して、気まずい雰囲気になった。夫よ、どうする！？



【ヤコポ・マンディッチの作品】

「これもいいですよ」と夫が見せたのは、マンディッチの遊び心いっぱいの、15センチの小さな小さな鉄の作品。自転車や工具・コンパスなど、様々な鉄の部品を組み合わせ、フラフープで踊る人やギターを弾く人などを表現してる作品のシリーズだ。彼の作品はエッジのきいた重みのあるものが多いが、このシリーズは見ていて思わずニヤツとしてしまうユーモラスに溢れている。見たとたん彼女の表情がパッと明るくなった。「素敵！これがいい、とてもいいわ」と。恋人を気遣って言っている訳ではないのは明らかだ。彼女の価値観のものさしにぴったりあった素敵な物を見つけたときにしかできない良い表情は、恋人が一番わかっている。「2人で今晚ワインを飲みながらこの作品をながめる」と青年は嬉しそうに言っていた。こうして150ユーロの小さい作品は4000ユーロの作品より、彼らにとって大切な思い出の品となるのだ。

画廊での仕事を通してたくさんのイタリア人と接することで、彼らの人生観や生活スタイルを知ることができる。考えさせられるところも多いが、どうしても違和感を感じる部分もある。しかし、外国語での会話と同じで、この違和感も「慣れ」なのだろう。日本とイタリアの価値観や習慣の違いを比べてしまい、私はまだまだストレスを感じることも多いが、画廊を取り巻く人々を観察しながら、イタリアという国、そこに住む人々を、少しずつ理解していきたいと思う今日この頃である。

[参考資料]

Galleria d' arte FABER ギャラリーファーベル

URL : www.galleriartefaber.com

(元当館受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>